

良知館のトイレに始まる館内、書院の日々の清掃です。非常に大変なことを二十年間にわたって続けていただいている。私たちが書院を訪れるとき、塵一つ落ちていないのが普通になっていますが、そのために大変な苦勞をいただいているということです。そして、何よりも、御夫婦そろって、先ほどの藤樹書院の目的を達成するために御努力いただいできています。

藤樹先生の教えは、「手入れの行き届いた書院の佇まいにこそある」と隆雄さんはおっしゃいます。

このようなことから、藤樹賞の理念である「藤樹先生の生き方や考え方に共感し、それを広めようという志をもって活動されている団体や個人の方」にあたるということ、表彰させていただくことになりました。言葉足らずではありますが、表彰の理由とさせていただきます。

### 令和三年度 高島藤樹会 藤樹賞受賞記念講演のあらまし

表彰委員会 淵田 豊朗

令和三年六月十三日（日曜日）夕方に総会の後、藤樹賞受賞式があり、淵田隆雄様と奥様の良子様、田中清行会長から賞状と記念品が渡され、代表して隆雄様の記念講演がありました。コロナ感染症対策のために参加者が制限されたので、あらま



しを紹介します。なお『内は現代訳、先生に対する敬語は略しました。演題：「この道の任」について

〜藤樹先生年譜から

その真意にせまる

藤樹先生の臨終。「慶安元年戊子つちのえねの秋、先生病す。（中略）脉うねそれ絶えなんと。則ちたすけ起きして端座はなざし、凡おほしに隠りて歎じて曰く、この道の任、誰かある、嗚呼無哉と云いて卒る。」これは年譜ではなく藤樹先生行状にあるのですが、先生の年譜を中心に「この道の任」について考えたいと思います。

年譜の最初には「先生、諱いみなは原、字は惟命これみか、姓は中江氏、仮名は與右衛門（中略）先生少より出て予州に仕へ、后、致仕して藤樹の下に学を講ず。門人従つて藤樹先生と称す。」

とあります。「藤樹」は、周辺の者が尊んだ呼び名です。祖父は、賤ヶ岳の戦いで手柄を挙げ、加藤光泰の家臣になりました。父も武士でしたが、関ヶ原の後、侍をやめました。自分が果たせなかった夢を託し、子に己の根源をたずねるの意の「原」という名前を付けたのだと思います。

九歳。祖父と米子へ。年譜には「祖父小川村に来て、先生を養はんことを欲す。父母、その一男なるを以て肯うべわず。」とあり、父母は「うん」といわなかったが、「祖父、固くこれを強ふ。（中略）先生、（中略）幼より物に愛着せず。故に父母を離れて遠く行くといへども、一毫も哀かなしむことなく、能く祖父母に孝あり。」「哀しまなかつた」とありますが、これが本当なら、のちに脱藩までして、母親への孝行のために帰らなかつたと思います。

十一歳。先ほどの行状に「十一歳にして初めて大学の書を読む。（中略）書を恭敬して嘆じて曰く、聖人学んで至るべし。（中略）是より聖賢を期待するの志あり」。立志のことです。この中の「聖人」ですが、孔子を始祖とする儒教は秦に迫害されました。その後、宋代になって朱子学として失った思想的立場を回復します。朱子学以前の「聖人」は文明と制度を作る聖王でしたが、朱子学では「聖人」を「天理に純にして、人欲の雑なきもの」（欲望の否定）

とし、学問は「聖人」への道であるとなりました。

十五歳。中江家を継ぎます。「先生平居、僚友相応接の間、一の過失あれば他を恥じ、自ら悔ゆ。月を越ゆれども忘るること能わず。（中略）一物の遺受も甚だ謹めり」、行状には「先生、（中略）礼書の中その、箴いましめの要なるものを取りて、所々の壁間に誌しるして、日用の則りとして強持すること久し」とあつて、守ることを紙に書き家のあちこちに張り付けていたということです。失敗を悔いて忘れない、物をもらわれないという先生を他の人たちは、変わり者だと思つていたことでしょうか。

二十歳。「先生専ら朱学を崇んで格套かたうを以て受用す。（略）」とあります。「格套（格法）」は、定められたことを厳密に守ることで、それを実行してしました。

二十五歳。二度目の帰省をし、孝行のために母を大洲に呼ぼうとしますが断られます。「独り予州にかへる。帰路、船中にして始めて哮喘せうぜん（喘息）を患ふ、きわめて甚だし。」とあつて、先生の病苦の始まりでした。

三十一歳。「持敬図説并に原人を著わす。此れより前、専ら四書を読みて堅く格法を守る。（中略）聖人の道かくのごとくならば、今の世に在りて、吾輩の及ぶところにあらず。」と朱子学が求める厳格さに挫折を覚え、「五経を取りて熟読する